



迷宮入り 殺人事件

11月26日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

11月26日のおはなし「迷宮入り殺人事件」

「死因は？」

「失血死です」

「刃物か？」

「いえ」

「ハジキか？」

「いえその、そういうあのあれでは」

ぼくが口ごもっているとヒグチ先輩はいらだたしげに肩を震わせた。

「わからんのか。どこの傷だ」

「どこ……出血箇所ですか？」

「あたりまえだ」

「歯ぐきです」

「なに？」

「歯ぐきから出血していました」

コルワツというような音がしたので振り向くと、デカ長のデスクの書類がびしょびしょになっていた。お茶にむせたらしい。

「大丈夫ですか？ デカ長」

ヒグチ先輩が声をかけると、デカ長はうつむいたままこちらに目もくれず、構うなというように左手を振り、デスクを大急ぎでふき取った。うつむき加減の姿勢のままでもなわな体を震わせているのでどうしたのかな、と思って見ていたら怒声が飛んできた。

「他には！」

「は？」

「他の出血箇所だ！」デカ長が吼えると窓ガラスがビリビリ振動音を立てる。「歯ぐきではなく！」

「他にはありません」

「何を！」

「出血は歯ぐきだけであります」

ぼくは何か古い軍隊映画の二等兵みたいな返事をしてしまった。

「フゲグッ」

「は、何でありますか？」

「は、歯ぐきからの出血だけで、ししし失血死したというのか！」

「ぷっ。デカ長。ぷぷっ」ヒグチ先輩が思わず声をかける。「大丈夫ですか。ぷぷぷぷぷ」

はっ。笑っている。デカ長もヒグチ先輩も笑っている。笑い事ではないのに。あの凄惨な現場を見たぼくにとっては、これからの生涯を通じて悪夢に悩まされそうなくらいの光景だったのに。

「は、歯ぐきと言ってもですね！」ぼくはあわてて状況説明にかかった。「そんな、普通の、歯ぐきから血が出たってレベルの出血じゃないですよ」

「くっくっくっ。そりゃあそうだろう」

「死なねえよなあ、それじゃあ」

「はい。ガイシャは恐らく現場の公園の鉄棒にかみついているところを後ろから」

「くわっかっかっかっ。鉄棒に？ 鉄棒に何だって？」

「なんでおめえ、てってっ鉄棒にかみついたんだ？」

「いえあのそれはまだ」

「それで後ろから襲われてたくさん歯が折れたのか」

「ええまあ、だいたい」

「だいたいって何だ？」デカ長が期待に目を光らせて鋭くぼくに迫る。「正確にはどうなんだ」

「事件当時ガイシャは口にマウスピースのようなものを装着していて」

「なんだって？ マウスピースのようなものって何だ？」

「あの、『目には目を。歯には歯を。歯にも目を』という文字が書かれたマウスピース状のもので」

クワーツという怪鳥音を発して、後は声も出さずにデカ長が笑った。ヒグチ先輩が言う。

「くっくっくっ。歯にも目をつて、くっくっく。ちょっと待ってくれ」

「そこには使い捨てのカラーコンタクトレンズが牙状に取り付けられていて、それが歯ぐきに」

「何でだよッ！　なんでコンタクトを歯につけるんだよ！」

「歯にも目団の特長なんです」

「ハニモメダン？」

「新興宗教です。イスラム教と神道と密教をベースにしたピヨヨット教・総いぬのふぐり派に属する武闘グループで」

「お、」おめえ！」苦しい息の中からデカ長が唸った。「嘘言ってるじゃねえだろうな。承知しねえぞ」

「いえホントなんです」ぼくは懸命に説明を続けた。「事実犯行現場に見つかったのは、教団内部で対立するピヨヨット教・ええじゃないか派の」

「ええじゃないか派？」

「はい。正確には『ええじゃないかさらばジャマイカ派』なんですが、略称ええじゃないか派と呼ばれてまして」

コケーツというような音を立てたのはヒグチ先輩だった。デカ長がデスクをばんばん叩きながら吠えた。

「やめろ！　もうやめろ！」

「そんなの記者発表するの、おれやだよ」

「おれもやだ」

腹をよじりながらデカ長とヒグチ先輩はのたうち回り、ぼくは部屋から追い出されてしまった。犯罪都市東京。こうしてまた迷宮入りの事件が増えていくのである。ぼくのせいじゃないからね。

(「使い捨て」 ordered by sachiko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

迷宮入り殺人事件[SFP0149]

<http://p.booklog.jp/book/39529>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39529>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39529>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.